

英作文指導における修辞技術論

中 村 嘉 宏

(1981年10月15日 受理)

Rhetoric and Composition: The Basic Problems in Writing

Yoshihiro NAKAMURA

序 言

言語活動・経験としての「書くこと」(writing)を、基本的に、書記媒体による伝達内容の符号化とする点では、外国語である英語の場合も、母国語である日本語の場合と同様であろう。しかしながら、外国語としての英語の場合、文章を「書くこと」の媒体となる書記形式や文法——統語論、形態論、意味論、音韻論を含む——さらに、社会・文化的背景、および、これと密接に関連した論理規則体系、すなわち、修辞法 (rhetoric) など、日本人学習者にとって、英語で「書くこと」の能力を習得する際、障害となる要因は決して単純なものではない。とりわけ、学習の上級段階、すなわち、学習者が、既に、英語の統語構造に関する知識を体得し、文法的、意味的に誤りのない文を作り出す能力を獲得している段階において、学習上、特に肝要と思われるのは、個々の統語単位をそれ自体完結的で纏まりのある思考の単位に意味化する知識や技能の習得である。いわゆる creative writing に欠かせないこの能力はその裏付けとして英語の修辞的思考を必要とする点で、英語教育における作文指導の過程において、当然、教授・学習の対象となるべき重要な技術的能力と考えられる。

「書く」技能は、また、他の言語技能——「読む」・「聞く」・「話す」技能——とも通底しており、これら技能と遊離した形で単独に成り立つ性質のものではない。結果的には、「書く」技能は、これら他の言語技能、とりわけ、「読む」技能と相補的關係を保ちつつ、有機的・総合的に系統立てられた教授・学習課程の中で、徐々に感得されてゆくものであろう。以下、「書くこと」の領域とそれに包摂されるさまざまな問題点——writing の目的・目標、writing に必要な能力・知識、speech と writing の機能上の相違など——を分析し、英語教育における作文指導の諸点を深り、最後に、この分野において、一般に等閑視されていると言って過言ではない「修辞的に考える」ことの意義と外国語 (英語) の作文指導との関連性について考察したい。

I. 英語教育における writing の目的・目標

作文指導の目的・目標を論ずるにあたって、まず、writing とは何か、具体的にどのような言語

活動を意味するのか、また、speech と writing の機能上の相違は何かについて簡単に触れてみたい。先にも述べたように、writing とは言表者をもつ心的内容すなわち意図の言語記号化 (encoding) を意味しており、具体的には、音声ならびに意味と結合した文字記号から成る、相互に觀念上の結びつきを有する複数の文を統語規則に従って配列・結合し、全体として纏まりのある段落構成を行う言語活動とすることができる。つぎに、意思伝達手段としての writing と speech の機能上の対照性については、まず、speech の場合、発話者と聞き手が、通例、場面を共有し、場面が指示物 (referent) の決定に重要な役割を担っていること、対話者の存在によって、双方が listener-speaker の役割を相互に果たすことで、発話の意図に関する聞き手の feedback が直接得られること、さらに、speech には、かぶせ音素 (suprasegmental phoneme) を含む韻律特性—stress, pitch, rhythm, pause, intonation など—や身振り (kinesics) を含むパラ言語の随伴など、発話の正確な理解を促進する諸要因の存在が認められるのに対し、writing の場合には、このような意思伝達機能上の諸特性がみられず、言語的要素——句読法、語頭や文頭の大字化、イタリックスや下線の使用など——を除いては、伝達内容を正確、簡潔に表現する手段としては、主として文章の論理的構成法が残されているだけである。視点を変えれば、読み手は、writing に関する以上の限られた機能特性を手掛りに、実在体として文字化された言表者の心的内容の解読 (decoding) を余義なくされているとすることができる (5: 2-3)。

簡単ではあるが、writing の内容と機能に関する上記の叙述から、作文教育の目的・目標がある程度推察される：まず、作文教育の目的・目標として、外国語である英語の文章経験を漸進的に深めることによって、学習者が英語表現の論理性と正確な表現を実現する言語技術を習得すること、さらに、これによって、読者に深い印象を残し得るだけの自己表現能力を具備すること、同時に、随伴的な点として、このことが学習者の思考と表現の質的向上に資することなど併せて指摘することが可能である。Marckwardt (25: 66-67) は、母国語の場合であるが、作文教育の必要性について、個人と社会という2つの観点から、以下のように論じている：

With respect to the topic of this particular chapter, we may best begin by asking ourselves why we teach composition at all. If we come at the question from a narrow point of view, our answer will undoubtedly be phrased in terms of a servise concept: the student must know how to express himself cogently and articulately in order to perform effectively in the rest of his school subjects, to write papers and reports, to take examinations, and so on. I would prefer, however, to take a somewhat broader approach here and to say that a higher literacy, or perhaps more accurately, a higher articulateness is an essential ingredient of a general or liberal education. If our social order is to continue over the next three or four decades in a form which we can approve,

presumably one in which wise and sound policies concerning all aspects of life will emerge from public debate that is at once vigorous and incisive, the need for skill in the use of language will be greater than it has ever been before. We shall need more individuals who can express themselves cogently and think clearly, and at the same time, the quality of the thinking and the expression must improve.

先にとりあげた表現の論理構造については、後出の修辞法 (rhetoric) に関する項で詳述することにして、ここで、多少曖昧さの残る‘表現の正確さ’について、若干、述べてみたい。作文指導において、恐らく、第一義的に要求されるであろう正確さ (correctness) の概念が、ただ単に、正しい文法形式やスペリングまた句読法の使用のみを意味するものとは考えにくい。文法的に誤りのない適格文や句を作り、それらを結合し、さまざまな機能をもつ節や句を伴った文形式を作るだけでは不十分である。正確さとは、これらに加え、さらに、文や句の形式に無理がないこと、すなわち、一定の脈絡に照らし、適切な語句や文形式が選択されているのかどうか、同時に、問われるような性質のものであろう。Close (7: 261) は、正確さの定義とその前提条件について論じ、単なる文法知識の正確さは真の言語能力とは峻別される必要があるとして、以下のように説いている：

...I would therefore define *correctness* with regard to English as *complete effectiveness of communication, which is dependent on conformity with widely-accepted convention, i. e. conformity with widely-accepted habits, not with rules and regulations.*

...*In order to speak or write English correctly ourselves, the essential thing is that we should express our meaning in such a way that our audience or readers understand it fully and precisely so long as they know English perfectly and are relying on no other medium. Whether the words or constructions we use are correct depends on (a) exactly what we have in mind and are trying to express, and where we want to place our emphasis, and (b) on our choosing the precise mode of expression conventionally associated with our particular shade of meaning.*

作文指導における正確さの問題について、Rivers (28: 260) もほぼ同様の見解を示しており、以下に引用するように、文法的な正確さと伝達・表現・叙述上の正確さとは区別される必要があるとしている：

...sheer accuracy must not be rewarded at the expense of real knowledge of and ability to use the foreign language. The answer to this problem lies in the awarding of a composite grade for compositions. Part of this grade will be given for accuracy of writing (correct grammatical forms, spelling, diacritics, and so on); another part will be allotted for variety of structure; another for lexical choice: another for idiomatic quality (authentic turn of phrase). In this way the inaccurate student will be penalized for his inaccuracy, but given credit for his ability to communicate his ideas in language which a native speaker would use. The accurate student will be rewarded for his accuracy, but not necessarily graded at a high level if he is lacking in wider knowledge and finesse of expression.

最後に、外国語の作文教育の困難性について述べてみたい。これについて Byrne は (1) 心理的要因——基本的に writing 活動は孤独な作業であること, (2) 言語的要因——書記言語に特有な伝達機能上の諸制約, (3) 認知的要因——書記言語の学習は認知活動であり, 脳裡に混然とした思想や概念を論理的に構想化し, 顕在的に表出する能力を要すること, をあげ, これら3つの要因が相互に影響し合い, writing を複雑多様な言語活動にしていると述べているが (5: 3-5), ここで, 視点を変え, 外国語としての英語の作文指導において, 特に, 教授者の側からみた教授上の困難点を1つ付け加えるとすれば, 学習者の知的・精神的発達度と学習者の英語に関する知識・技能面における熟達度の不均衡をあげることができよう。両者の整合性をどこに求めるべきかという問題は外国語学習初期の段階からかなりの期間持続するものと予想されるが, 外国語の作文学習が進む一方で, 学習者が母国語の基本的な作文法(修辞法)の指導を受けず, また, これに対する認識を欠いている場合には, この問題はより一層深刻なものとなってくる。学習者の側に日英語の表現形式に対する明確な視点が欠けている以上, 結果的に, 前述した writing の目的・目標の達成に向けて, 教授者の負担はそれだけ過重なものとならざるを得ないであろう。

II. Writing に必要な能力——言語的能力 (linguistic abilities) と非言語的能力 (non-linguistic abilities)

学習活動・経験としての writing に必要な諸能力の実体は, 以下, この領域に含まれる内容の分析を通して自づと明らかになってくるはずである。基本的には, writing の領域とは目標言語の書記体系に関する基礎的な知識習得の段階から書記体系を媒体とする自己表現というもっとも高度な学習活動に至る段階を内包するものと思われるが, これについて, たとえば, Mackey (23: 282-292) は writing を① graphics (英語の alphabet を正しく書くこと), ② spelling (文字を正しく組み合わせること), ③ composition (書記言語による自己表現) の3段階から成り立つ言

語活動とみており、また、Rivers (28: 243-244) も、同様に、writing に含まれる学習活動を① notation, ② spelling, ③ writing practice, ④ composition, に下位区分し、その内容を以下のように説明している:

The distinction we have drawn among types of writing activities reflect the four major areas of learning involved in the writing process. The student must learn the graphic system of the foreign language; he must learn to spell according to the conventions of the language; he must learn to control the structure of the language so that what he writes is comprehensible to his reader: and he must learn to select from among possible combinations of words and phrases those which will convey the nuances he has in mind in the register which is most appropriate. The first three of these processes must be learned so thoroughly that they no longer require the concentrated attention of the writer, who may then give his mind to the process of selection among possible combinations.

上に引用した Mackey および Rivers による記述は、同時に、以下に述べるような知識・能力が writing に欠かせないことを間接的に示すものと言えよう。すなわち、学習者が自己の脳裡に生じた抽象的な思想や事実を表現意図に従い、文字媒体によって顕在化するには、まず第1に、言語能力として、目標言語の正書法 (orthography) の知識を得、次に、語の特定の組合せによって意味の伝達を可能にする統語規則を習得し、さらに、適切な使用域で連続的に文を結合する運用能力に加え、非言語的能力として、表現の論理的な構造を実現する技能 (技術) を習得する必要性があることを示唆するものと言うことができる。ところで、Harris (14: 68-69) は writing の構成要素とそれに対応した諸能力を以下のように指摘しているが、彼の場合、表現されるべき実在体としての内容とその内容の顕在化に欠かせない題材の組合せ能力——文章の構成能力——に明確な言及がなされており、修辞法との関連で注目されてよい:

Although the writing process has been analyzed in many different ways, most teachers would probably agree in recognizing at least the following five general components:

1. Content: the substance of the writing; the ideas expressed
2. Form: the organization of the content
3. Grammar: the employment of grammatical forms and syntactic patterns
4. Style: the choice of structures and lexical items to give a particular

tone or flavor to the writing

5. Mechanics: the use of the graphic conventions of the language

From the above we see that the writing process, as commonly conceived, is a highly sophisticated skill combining a number of diverse elements, only some of which are strictly linguistic.

以上三者の引用から、心的内容を論理的に秩序だて、これを目標言語の言語形式に定着させることを狙いとする作文指導には、単に、文法的に正しい文を作り出す能力に限らず、さらに、目標言語とその文化に慣習的な修辞法の知識およびそれに基く修辞的思考の養成が包含されていることが容易に推察される。このことは、目標言語の慣習的な表記法に習熟し、文法知識や語彙項目を蓄積するだけでは、writingの学習活動は、いわば、書き言葉による文法練習の域を出ず、自由な言語制御を伴った自己表現が、未だ、十分でないことを示すと同時に、併せて、文章全体を纏まりのある統一体として成り立たせるのに必要な思考の連続性——書き手の表現意図である主題の設定と主題の説明に欠かすことのできない題材の選択と組合せによる全体的秩序づけ——を明確に表現する修辞技術が、非言語要素として、writingに不可欠との認識を学習者の側に徐々に深めてゆくことが肝要なことを示すものであろう。今日、英語が世界において、特に、コミュニケーション手段として有力な言語的地位を有すること、また、修辞が読み手に対する説得効果と表裏一体の関係にあることを思えば、異文化間コミュニケーションにおける英語修辞法の知識とその役割を無視することはできない。作文指導における修辞の重要性と作文技術 (composition skill) としての英語の修辞法について論じた Taylor (32: 69) の見解はこの点で示唆に富むものと言えよう:

...in addition to linguistic ability, writing involves the muscular coordination entailed in handwriting. Paragraph or essay writing requires knowledge of the rhetorical rules of the language and of paragraph and essay structure. For English, these rules involve knowledge of topic sentences, supporting sentences, and concluding statements. In addition, the writer must know that the supporting statements can serve any of a number of logical roles within the paragraph or essay, such as chronological order, cause and effect, process, comparison, contrast, and description. Furthermore, composition writing entails knowing the difference between a generalization and a specific piece of information. And last, the writer must know how to decide what is necessary to support his topic sentence and what is extraneous.

